

メッセージアウトライン

ローマ14：13～23「愛による行動」

[13]「ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい」

やがて、すべての者は神の御前に自分のことを申し開きをすることとなる。→ローマ14：12 それゆえ信仰者にとって13節の教えは当然努力し、守るべきことである。

次節以下でパウロは具体的に食べ物の問題を取り上げていく。

[14]「主イエスにあって、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。ただ、これは汚れていると認める人にとっては、それは汚れたものなのです」ここで言う「汚れている」とは不潔、不衛生という意味ではなく、神の前に聖別されていない、宗教的に汚れているという意味。しかしパウロが主において確信していることは、食べ物自体が汚れているということは何一つないということである。→マルコ7：14～19 しかし、旧約時代の古い習慣から脱しきれない、信仰の弱い人(14:1～2)がある種の食べ物を、これは神の前に汚れていると思うなら、それはその人にとって汚れたものとなる。これは食べ物自体の性質ではなく主観の問題である。

[15-16]「もし、食べ物の中で、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によって行動しているではありません。キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物の中で、滅ぼさないでください。ですから、あなたが良いとしている事がらによって、そしられないようにしなさい」

ある食べ物は汚れていると考える信仰の弱い兄弟の前で、その食べ物を平気で食べるならば、その人は心を痛め、つまずき、信仰を捨ててしまうかもしれない。あなたのそのような行為は、もはや愛による行動ではないとパウロは言う。この箇所「滅ぼす」とは永遠の滅びに追いやるという意味ではなく、霊的に傷つけ、悩ませるという意味。ここでは食べ物のごとくが例にあげられているが、これはあらゆる面において考えなければならぬことである。信仰者は各自、良いと思っている事がらによって他の人に、批判されたり、そしられたりしないようにしなければならない。

[17]「なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」神の国の本質的内容は、飲食などの日常的なことではなく、義と平和と聖霊による喜びにある。「義」とはこの場合、信仰者の交わりの中に現されていく神との正しい関係、他の兄弟姉妹たちとの正しい関係のこと。「平和」も同様に神との平和、他者との平和な関係のこと。「聖霊による喜び」とは聖霊の働きによって与えられる内的な喜びであり、喜びに満ちた人間関係のこと。これこそ、神の国の本質、教会の本質である。

[18-19]「このようにキリストに仕える人は、神に喜ばれ、また人々にも認められます。そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう」

ここで教えられているようにクリスチャンがその信仰の自由を他の人をつまずかせないように用いていくならば、それは神に喜ばれ、また人からも尊敬され、認められること

となる。そして、そのようにして「平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つことを追い求めること」が勧められている。

[20-23]ここは内容的には14~16節と同じ。

「神のみわざ」とはこの場合、キリストによって救われた者たちの交わり、教会の交わりのこと。それを食べ物に関するトラブルで破壊してしまってはならないというのである。(20) 当時は偶像に備えた肉が市場で普通の肉と混ぜて売られていた。信仰の弱い人は、そのような肉を食べるクリスチャンを見てつまづく。それゆえ、信仰者は愛による行動として、肉を食べず、ぶどう酒を飲まず、そのほか兄弟のつまずきになることをしないことは良いことであったのである。(21) 飲酒について聖書が教えていることは→エペソ5:18、Iコリント5:11、箴言20:1、23:31~32

どのようなことであれ、クリスチャンである兄弟姉妹たちにとって、人のつまずきになるようなことをしない生き方をすることが大切。自らが良しとする判断と確信が神の望まれるところと一致する信仰者は神にさばかれることがなく、祝福された者となる。(22) しかし、神に対する真実の心からではなく、神の前に信仰的良心をごまかしつつなすところの行為は偽善となり罪に定められる。(23) これは食べ物だけではなくすべての分野に及ぶことである。→使徒5:1~11 (アナニヤとサツピラの例)